

21世紀と夏目漱石（1）

—現代におけるいくつかの徴候—

金 戸 清 高

Several Prospects about Issues of 21Century and Natsume Soseki

KANETO Kiyotaka

1. はじめに

本稿執筆にあたり多くの示唆を得た多くの先行研究群の中から、2つの著作を掲載する。まずは桜井智恵子氏の『教育は社会をどう変えたのか—個人化をもたらすリベラリズムの暴力—』¹である。桜井氏は現代における格差社会は近代以降の富国強兵思想に基づくエリート養成第一主義の教育システムに起因し、子どもの幸福はそうしたリベラリズムによる能力主義教育を脱構築するところからスタートされなければならないと指摘する。次に河野龍太郎氏の『成長の臨界—「飽和資本主義」はどこへ向かうのか—』²である。河野氏は、大量生産や大量消費社会は既に限界に来ており、我々はこれまでと違った枠組みで社会を築かなければならないと指摘し、著書の終章にて具体的な提案もしている。

我々にとって、現代の様相を俯瞰し将来を見通すことは難しい。それどころか我々はともすれば不自分に都合な状況を意識から排除してしまうこともある。ベイトソンが指摘するように、「無意識のなかに含まれるのは、意識がふれたがらない不快な事柄だけではない。それ以上詮索する必要のないほどわれわれが熟知している事柄も多く含まれるのである」³。本稿でも再三引用させていただくことになるが、両氏の著書は、教育と経済という異分野での論考ではあるが、共に現代の様々なシステムに疑義を呈示し、著者の蒙昧を知らされたことに深く感謝したい。

2. グローバリズムから自国中心主義へ

グローバリズム、すなわち「国境という物理的な垣根を越えて、経済、政治、文化などを地球規模で拡大させる」考え方は産業革命が契機となった。デメリットは、「市場競争の加速による貧富の差の拡大」にあるといわれる。⁴そうしたグローバリズムが崩壊し、先進諸国は様々な施策を内向きに軌道修正し始めた。例えばアメリカ、トランプ政権における「アメリカ・ファースト」のスローガンの下、TPP脱退（2017）、パリ協定からの離脱（2019）を表明した。一方ヨーロッパではイギリスが国民投票によりEU脱退を決議した（2020）。そうした内向きの施策が新型コロナウイルスによるパンデミックによって社会の分断に大きく拍車をかけていった。顕著であったのはG.フロイド氏の事件である。⁵

一方日本の状況はどうであったか。第二次大戦の敗戦によって日本の「大東亜共和国」構想は夢潰えたが、戦後の外交、経済政策としてそれは受け継がれ、成功を収めた。しかも自国の繁栄が多くの途上国の犠牲によって成立していることに無自覚なのである。桜井氏は以下のように指摘する。

百円均一の市場が成立しているのは、徹底的に安価な人件費がそこにあり、その人件費に甘んじざるをえない誰かがいるということだ。でも、私たちは百均ショップでその誰かに想いを馳せることはしない。さらに、人件費が安く買い叩かれるということは、実は構造的に自分の人件費につながっているにもかかわらず、私たちはその現実が見えていない。<略>高度経済成長期にアジアを植民地化し安い労働力を収

奪していた日本は現在、国内に技能実習生という植民地化構造を招き入れるようになり、三・一一以降はとくに原子力発電などの地方の植民地化という構造も顕在化するようになった（傍線引用者。以下同）。⁶

人間の無意識の差別感情については先に引用したペイトソンの考察の他、最近ではキム・ジヘによる次のような指摘もある。

ほとんどの人は平等という大原則に共感しており、差別に反対している。少なくとも、憲法（韓国）にも明示された規範である平等と差別禁止の原則に、堂々と反対する人はほぼいない。しかし、相対的に特権を持った集団は、差別をあまり認識していないだけでなく、平等を実現するための措置に反対する理由や動機を持つようになる。その一方で、自分が差別をしているという事実を認めるのは難しいため、結果的に矛盾した態度をとるようになる。国家権力に対しては民主主義と人権を叫んできたのに、自分が持つマジョリティとしての特権を認識できず、差別的な態度をとる「進歩派」政治家を時おり見かけるように、問題は、このような作用のほとんどが自然に起こるという事実である。世の中に（権利の）傾斜があることを考えずに平等を求めると、不平等な解決策におちいりやすい。⁷

日本人の戦後意識に対して井上ひさしは「夢の痂」⁸において主語を曖昧にする日本語の特色に注目し、「戦犯を悪者にして知らぬ顔を決め込んだ日本人の戦後を、滑稽味をまじえて問う」⁹だが、小森陽一氏は更に踏み込んで指摘する。

戦争の元凶として一切の責任を負わされた東条英機をはじめとするA級戦犯たちは「大元帥天皇」から切り離されて裁かれた。彼らに表象される「軍部の中枢」によって企図され、「教育勅語」体制の軍国主義教育によってマインド・コントロールされ、戦争に協力させられた、主体にならない隷属者の像として、「一般の日本人」の自己像は免責されるのだ。そしてこの免責によって、加害者として告発される声を聞き取らなくても済む安全圏に自らを囲い込むことが可能になるのである。¹⁰

「敗戦」を「終戦」と言い直し、朝鮮戦争による

特需を原動力として、1954年末に「神武景気」が始まった。1955年、GDPが戦前の水準を上回ったことを受け、1956年7月17日、政府は経済白書で「もはや戦後ではない」と宣言するに到った。以後1973年のオイルショックまで戦後の高度経済成長は続くが、そのような経済成長が当初は各地で公害問題を惹起したこともあいまって、周辺の途上国にその犠牲を負わせる形で発展したことは忘れてはならない。桜井氏は以下のように指摘する。

日本では、60年代後半から高度経済成長に伴う労働力不足、賃金コストの上昇、地価高騰による工場立地の難しさ、海外投資の自由化がとられたことを背景に、開発途上国への投資が急増した。国内での企業規制の強化で操業が困難になった公害を発生していた企業は、東南アジアへ工場を移転させた。¹¹

日本企業は海外に安い労働力と危険な工場を建てることで国内をクリーンにしている。そうした企業に支えられて現代の日本経済は繁栄を極めている。そして日本人の多くはその事実を知らない。

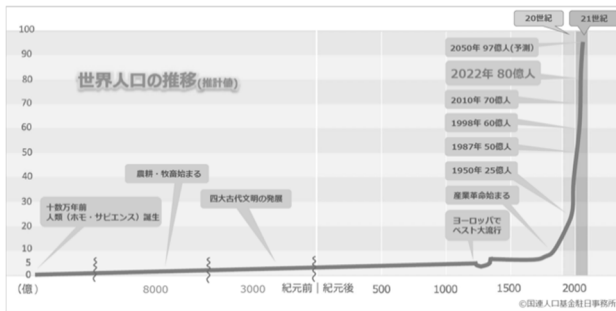
このように世界が自国主義に向かう中、対立と分断はこれまでにない規模で広がっている。21世紀の幕開けを9.11に求めるなら、これがその後のアフガン戦争、イラク戦争を引き起こしたことは同時代の証言を俟つまでもない。2014年のクリミア併合によりロシアとウクライナの対立は深刻化し、現在は2022年のウクライナ戦争に発展した。同戦争はロシアと西側諸国との対立を大きくし、第三次世界大戦を思わせる様相となっている。¹²

3. アントロポセン（人新世）

「アントロポセン」（Anthropocene：人新世）はパウル・クルツェンの提唱した術語である。人類の活動が、かつての小惑星の衝突や火山の大噴火に匹敵するような地質学的な変化を地球に刻み込んでいることを表わし、その発端は18世紀、産業革命に伴う人口爆発に求められるという。ここでは産業革命と資本主義社会の展開との関連について論究する。

国連経済社会局発表資料によれば2080年には地球人口は110億に及び、2100年以後は減少に転ずるといふ。¹³大量生産、大量消費による資本拡大は環境破壊

や資源の枯渇、地球温暖化を引き起こした。



(「出典：国連人口基金駐日事務所ホームページ」)

人新世は地球の生態系に多大な影響を及ぼす時代として後世に遺されることとなる。古谷田奈月氏は著書『フィールダー』の登場人物に「人類は終活に入った方がいい」と語らせた。

「人間はもう繁殖してはだめ。国を挙げて、世界各国と協力し合って、みんなで終活を始めなくちゃいけない」「こどもの安全、男女平等、格差は正、環境保全—もういいんです、そんなこと！ 人間のため、地球のためというのなら、持続可能な開発のすべてを即中止すべきです。考えるべきことはただ一つ、人類史をたたく方法なんですよ。本当はみんなわかっているはず。社会にはもう限界が来ている。政権交代だとか、戦争反対だとか、的外れですよ、政治がそもそも人間に合っていないのに。人間はもともと社会的で政治的な生き物かもしれません。でも、同時に、社会にも政治にも向いていないんです。それに、どのみちいずれ気候がわたしたちを殺します。そうでしょう？ だから人間の尊厳なんていうなら、苦痛の少ない絶滅方法こそ見つけておくべきなんです。だいたい、人類を存続させる理由はなんでしょう？ 誰にとって得なんです？ いいじゃありませんか、絶滅したって！」¹⁴

産業革命による環境破壊の端緒はイギリスのロンドンスモッグにみられる。これは石炭燃料の利用によって、煙や煤が霧に混ざり、呼吸器疾患など多くの被害を出した。夏目漱石もロンドン留学時代にスモッグを経験している。

倫敦(ママ)ノ町ヲ散歩シテ試ミニ啖(ママ)ヲ吐キテ見ヨ真黒ナル塊リノ出ルニ驚クベシ何百万ノ市民ハ此煤煙ト此塵埃ヲ吸収シテ毎日彼等ノ肺臓ヲ染メ

ツゝアルナリ我ナガラ鼻ヲカミ啖をスル ハ氣ノヒケル程氣味悪キナリ¹⁵

産業革命はまた多くの少年労働者が炭鉱での労働を強要され、1842年に実施したエンゲルスの調査では、農村地帯の労働者の平均寿命が38才だったのに対して、都市労働者(リヴァプール)の平均寿命は15才だったという。こうした現状がラウンツリーによる1899年、1935年、1951年の3回にわたる貧民調査の契機となりイギリスの福祉制度を大きく進展させる契機にもなった。

あるいはベートーベン(1770～1827)の死因である。

米国エネルギー省の国立アルゴンヌ研究所(イリノイ州アルゴンヌ)は12月6日、ベートーベンの頭蓋骨について、X線蛍光分析を行い、多量の鉛を検出したと発表した。米Pfeiffer Treatment Centerの主任研究者でベートーベン研究プロジェクト長のBill Walsh氏は、ベートーベンが鉛中毒で苦しんだことを示す確固たるエビデンスを得た」としている。これまでの別の研究で、ベートーベンの髪の毛を分析した結果、鉛中毒の可能性が示されていたが、それを確認する結果となった。¹⁶

ベートーベンにはドナウ川の川魚料理が好物であったため、汚染された魚肉が死を早めたという。あるいは当時防腐剤として鉛成分が使用されたワインの飲み過ぎであるともいわれ信憑性は現在も不明であるが、上記報道は環境汚染が18世紀末から深刻化していたことの証左にもなるだろう。

一方日本国内での環境汚染問題は古くは「足尾銅山鉱毒事件」が挙げられる。これは19世紀後半の明治時代初期から栃木県と群馬県の渡良瀬川周辺で起きた、日本初の公害事件である。足尾銅山の開発により排煙、鉱毒ガス、鉱毒水などの有害物質が周辺環境に著しい影響をもたらした。1890年代より栃木の政治家であった田中正造が中心となり、国に問題提起するものの、加害者決定はされなかった。同事件は志賀直哉が父との関係を悪化した一つの要因ともなった。下って1960年代には高度経済成長の傍ら、熊本の水俣病、富山のイタイイタイ病、新潟水俣病、四日市ぜんそくが、四大公害病といわれ、各地で健康に被害を与える公害病が深刻化した。

R.カーソンは農薬の残留性や生物濃縮がもたらす生態系への影響を指摘した。¹⁷更に現代では「地球温暖化問題」、すなわち化石燃料の燃焼による過剰なCO₂など温室効果ガス排出を原因とする環境破壊が地球温暖化現象や異常気象の要因となっているとされる。2015年9月に国連総会で採択された「持続可能な開発目標」すなわちSDGsとして17の世界目標と169の達成基準が示されたが、そもそも「開発」と「持続可能」は両立しない概念であってそうした「グリーン成長」に懐疑的な論¹⁸や同年12月に採択された「パリ協定」では産業革命からの気温上昇を1.5度にとどめるとされたが現在その実現は実現困難な状況にあるという。¹⁹

4. 人口と飢餓問題

ジャーナリストの犬養道子（1921～2017）は地球規模の環境問題を先進国と途上国との関連に着目し『人間の大地』を著した。²⁰まずは途上国の人口増加問題について引用する。

貧困地の貧民層の人口が多すぎるから食べものが足りず飢えるのだ」と言う一般論への答を、一行だけ、かかげておく。結びつける単純論（これは一七八九年出版され当時大注目をあびたいわゆるマルサス理論の名残）が、あまりにも広まっている今日、一切の注釈ぬきで、答だけをまずぶつける。／真の答は逆なのだ。と／食べられないから増えるのだ、と。

犬養は更に我々先進国が途上国を飢えさせており、更にそうした深刻な事実到我々が気づいていないことを指摘する。「飢餓は自然発生ではなく、つくられたものだ」という。「飢餓を呼ぶ天災すらも」と続ける。次は環境破壊問題についての引用である。

食生活を可能にしてくれる性質を持つ大地部分（バイオシステムつまり有機体的生組織を多く有する土部分）は、＜略＞わずか三十cmであった！＜略＞中南米で全地の六十一パーセント／南アジアで五十パーセント／北アフリカで三十パーセント余／驚くべきパーセンテージで、あの大切な「三十センチ」は荒廃化した＜略＞サハラ以南国もろもろにおいては過去十七年間に、約百キロと言う、大へんな長さで、荒廃化

した土地が侵攻して来るのが見られた。＜略＞一九七二年以降、東アフリカにサハラ以南地に目をおおう惨を伴って立ちあらわれた飢餓は、そのためでもある。言いかえれば以南国各地における濫伐・濫用・大地虐待の、人工が生んだ人災であった！一木一草のない死の砂漠化の百キロ進行は、ある箇所だけに限られているのではなく、あの広大なアフリカの（日本全面積三十六万平方キロ、アフリカ三千六百万平方キロ）ほぼ三分の一を占める地帯全部にわたる！

「けだし 万物は陣痛の苦の中でもだえつつ人の子ら（人間）の和解を待ち望む」（ロマ 8：19）は書中に引用された聖句であるが、広大なアフリカの大地が「ケロイド状に」剥き出しになった切実な現状が見事に言い当てられている。

ここで留意されねばならないのは、我々はどうした環境破壊の惨状や地球上のあちこちで起きている戦争や内紛、異常気象による災害を、あるいはかち、あるいは憤りを覚えることはあっても、我々自身が実は加害者の一翼を担っていることに無自覚であるということなのである。たとえば2022年に勃発したウクライナ戦争において、西側諸国はロシアを非難し、また経済制裁を行おうとしている。その一方でヨーロッパの何カ国は原発の資源としてロシアのウランに依存しているという。²¹日本も例外ではない。たとえば中古車を含む車の輸出禁止は、日本がG7の他の国と足並みをそろえ、ロシアに科している経済制裁の項目の一つではあるが、輸出が禁じられているのは価格が600万円超の車のみで、中古車だとメルセデス・ベンツなどごく一部の高級車しか該当しないのでほとんどの車は制裁前と変わらずに輸出でき、その量はむしろ増えているという。「経済産業省の幹部は『自分たちの制裁で、逆に日本経済が打撃を受けることはあってはいけない』と打ち明ける。別の幹部は『「真空斬り」が大事だ』と語る」²²と朝日新聞が報じた。問題を戻すと、我々の生活が様々な企業に依拠する以上、我々もその企業が食った途上国の利益を共に侵害していることになるのである。²³

近年多くの評家が資本主義の限界を指摘するようになった。たとえば斎藤幸平氏は人口減少社会にみあった富の分配法を「資本論」の読み直しに可能性を見いだす。²⁴そして冒頭で紹介した河野龍太郎氏も

その一人であり後に詳しく引用するが、ここではまずジェイソン・ヒッケルの指摘を紹介する。

わたしたちは、人間の文明が危機に瀕していることをほぼ半世紀前から知っていたのに、生態系の崩壊をお食い止めることに関して、まったく進歩が見られないのだ。＜略＞社会が石油燃料に依存していることと、化石燃料企業の異常な行動は、より深刻な問題の症例にすぎない。その問題とは、過去数世紀にわたって多かれ少なかれ地球全体を支配するようになった経済システム、資本主義である。＜略＞資本主義が歴史上の他の経済システムの大半と異なるのは、それが絶え間ない拡大、すなわち「成長」の要求を中心として組織されているからだ。²⁵

資本主義は絶えず成長することを宿命とするが、それが将来的に持続しないことが地球人口が減少に転じる22世紀を前に明らかになってきた。我々は従来の資本主義に対するオルタナティブな経済システムを模索する時代が来ていることを自覚しなければならない。

5. 「ケインズ予言」の評価

イギリスの著名な経済学者ケインズは、世界大恐慌のさなかである1930年に、先進諸国の生活水準は100年後には4倍から8倍程度になっているはずで、1日に3時間も働けば生活に必要なものを得ることができるようになるだろうと予言したという。以下「われわれの孫たちの経済的可能性」から引用する。

百年後の二〇三〇年には、先進国の生活水準は現在の四倍から八倍の間になっていると予想される。
＜略＞大きな戦争がなく、人口の極端な増加がなければ、百年以内に経済的な問題が解決するか、少なくとも近く解決するとみられるようになるといえる。これは将来を見通すなら、経済的な問題が人類にとって永遠の問題ではないことを意味する。＜略＞今後かなりの時代にわたって、人間の弱さはきわめて根強いので、何らかの仕事をしなければ満足できないだろう。＜略＞天地創造以来はじめて、人類はまともな問題、永遠の問題に直面することになる。切迫した経済的な必要から自由になった状態をいかに使

い、科学と福利の力で今後に獲得できるはずの余暇をいかに使って、賢明に、快適に、裕福に暮らしていくべきなのかという問題である。＜略＞経済的な必要から自由になったとき、豊かさを楽しむことができるのは、生活を楽しむ術を維持し洗練させて、完璧に近づけていく人、そして、生活の手段にすぎないものに自分を売りわたさない人だろう。＜略＞一日三時間、週十五時間勤務にすれば、問題をかなりの期間、先延ばしできるとも思える。²⁶

それから100年近く経った今、生活水準は高くなったが労働時間は減っていない。「東洋経済」²⁷は「ケインズ予言」を評価し、「アメリカの1人当たり実質GDP(国内総生産)は2018年には1930年の6.9倍になってい」ながら、その分「消費水準」も上がってきていることを指摘する。また労働時間もたとえば日本の法定労働時間は8時間である。過重労働が社会問題ともなっていることを考えれば労働時間は決して減っていない。これは「生活に必要なもの」の水準が高まったことに起因する。

河野龍太郎氏は「ケインズ予言」を受けて、現代を「豊かだが貧しい社会」と指摘する。現代は「高所得者であるほど長時間働いている」²⁸という。人間の欲望には限りがない。氏が例示した「ミダス王の指」はこうした人間の欲望を言い得て妙である。「王様の耳はロバの耳」のエピソードで有名な暴君ミダスは実在の人物であったが彼についてはもう一つ別の伝説がある。以下はTURKISH Air & TravelのHPからの引用である。²⁹

ミダス王は、黄金を好み、王が富を独り占めすべきだと思っていた人物でした。／あるとき、ワインの神ディオニュソスと半人半馬のシーレーノスがフリギアを旅している途中、酔っぱらったシーレーノスが迷子になってミダス王のバラの庭に迷い込み眠りに落ちてしまいました。／シーレーノスを見つけたミダスは、彼を宮殿で十日十晩もてなします。これに感銘を受けたディオニュソスは、ミダスの願い事を一つ叶えるというと、ミダス王は「触れた物全てを金に変え、より豊かになる事」を望みました。／触れた物全てを黄金に変える力を手に入れたミダス王ですが、触れた食べ物も飲み物も金になり飲食はできず、有名な彼のバラの庭も全て黄金に変わってしまうと、彼は嘆き悲しみこの力が不吉で破壊の元であると気

付き富を嫌悪します。そして、この力を無くして元に戻るようにディオニュソスに頼むのです。／ミダスのこの状況を憐れんで不憫に思ったディオニュソスは、ミダスにパクタロス川に行き水浴びをするように言います。パクタロス川で水を浴びたミダスは元に戻り救われました。

荒唐無稽な話ではあるが、人間の欲望は事ほどさように根深いのではなからうか。『新約聖書』「ヤコブの手紙」の一節「人はそれぞれ、自分の欲望に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。そして、欲望がはらんで罪を産み、罪が熟して死を生みます」(1:14～15)はこうした人間の物欲の恐ろしさをよく言い当てている。より良い生活を、より豊かな人生を送るため、たしかに物欲は必要なものかもしれない。しかしその物欲が私たちを死に至らしめるとしたら、どうだろうか。潰れるまで膨張し続ける企業、資本主義社会は、お腹が破裂するまで食べ続ける貪欲な生き物のようである。イソップの寓話を引き合いに出すまでもない。³⁰我々は今こそそうした欲望をセーブすることを覚えなければならない、そのような時代に今は来ているように思われる。しかも人口がこれからも増え続け、大量生産に見合った消費が保障されるという資本主義の前提が崩れた現代である。にもかかわらず猶売り続けようとするなら、どこかで消費者を欺くしかない。コンプライアンスに違反する企業が続出するに違いない。

河野氏は「これまでの政治システムは、成長の果実である税収の分配を主たる対象として発達してきたため、低成長の時代にはうまく機能しなくなる」と指摘し、「足るを知る」ことこそが重要だと語る。今我々は東洋の叡知、物質ではなく心の豊かさが求められる時代ではないか。

因みに河野氏が引用した「足を知る」は老子の言葉である。「老子」第三十三章に次のように記される。³¹

知人者智、自知者明。勝人者有力、自勝者強。知足者富、強行者有志。不失其所者久。死而不亡者壽。(人を知る者は智く、自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力有り、自ら勝つ者は強し。足るを知る者は富み、強めて行なう者は志有り。その所を失わざる者は久し。死して而も亡びざる者は 壽 し)

ヒッケルは『『豊かさ』が成長の解毒剤となる』と語っている。またヒッケルはより成熟した消費生活を具現する国としてデンマークを例示する。

社会がより平等なデンマークの国民は、他の高所得国の人々に比べて、購入する衣服が少なく、長く使うことが明らかになっている。企業が広告にかかる費用も少ない。なぜなら不必要な贅沢品を買うことに人々が興味を示さないからだ。³²

成熟した消費社会の実現がCO₂削減に繋がるという。デンマークはかつて内村鑑三によって紹介された国でもあった。³³すなわち1864年の戦いによって南部最良の2州を奪われたが信仰の故に故国フランスを追われたユグノーの子孫であったダグラスの信仰的熱意によって荒れ地を開墾し、酪農と貿易によって富める国となったという。現代も福祉の行き届いた国として学ぶべきところの多い国である。

ヒッケルは更に「資本主義の次に来る社会」への指針として「ヨベル年」に学ぶという提案をする。

生態系崩壊の時代において、債務の帳消しは、より持続可能な経済へ向かう重要な一歩となる。＜略＞古代オリエント社会は定期的に帳簿を一新して、非商業的な債務を無効にし、債権者による束縛から人々を解放した。この原理はヘブライ法で「ヨベルの年」として制度化され、借金7年ごとに自動的に帳消しにされた。実のところ、債務の帳消しはヘブライの贖罪の概念の核になった。³⁴

「ヨベルの年」とは7年ごとに土地を休ませる安息年が7回巡った次の年、つまり第50年目の年を指す。古代ユダヤ社会ではその年には

1. 畑の休耕 (レビ記 25:21～22)
2. 売却されていた土地の返還 (同 10～33)
3. 奴隷の解放 (同 25:39～43、54)

がなされたという。その基本理念は原状回復である。富の偏在が是正され、土地も人も神の所有であることが確認された。しかし、旧約聖書の中には、この規定が実際に実行されたという記事はないという。³⁵

神との契約に生きる民の文化である「ヨベル」の概念は特に日本では理解されにくいものであろう。しかしながら宇宙飛行士であった毛利衛氏は「宇宙

からは国境線が見えません」³⁶と語った。ベトナム戦争のさなか、「すべての人々が幸せな人生をおくっていると想像してごらん」³⁷と歌ったJ.レノンの訴えを空しくしてはならない。

6. まとめ

これまで述べてきたように、21世紀は18世紀の産業革命を端緒とした資本主義社会が臨界に達しようとしている時であり、9.11に始まる対立、抗争が蔓延する中、環境破壊、異常気象による災害の増加と世界的な課題が山積する時代であるといえる。一方夏目漱石（1867～1916）の時代とは一見何の繋がりも見いだせないようである。しかし彼もまた資本主義社会の恵沢を受ける中で「いかに生きるか」を問い続けた一知識人であった。明治大正という日本の近代を生きた漱石はその先に何を見ていたか、何を見ようとしていたかを探ることで、未来への指針となればと願う。

注

- 1 2021年9月 明石書店
- 2 2022年 慶應義塾大学出版会
- 3 G・ペイトソン「プリミティブな芸術の様式と優美と情報」『精神の生態学』改訂第2版（Steps to an Ecology of Mind）佐藤良明訳2000年2月新思索社）（p219～p220）
- 4 ELEMENIST Editor「グローバリズムとは？」（<https://elemenist.com/article/1470>）他
- 5 アフリカ系アメリカ人の黒人男性ジョージ・フロイド氏（George Floyd）が、2020年5月25日にミネアポリス近郊で、警察官のデレク・ショーヴィンの不適切な拘束方法によって殺害された事件で。この事件以降、全米でBLM運動と暴動が多数発生した。
- 6 1と同（p64）。
- 7 キム・ジへ『差別はたいてい悪意のない人がする』ユン・イキョン訳 2021年8月大月書店（p38～p39）。
- 8 2006年6月、栗山民也の演出により、新国立劇場にて初演。
- 9 「天声人語」2010年4月13日『朝日新聞』
- 10 「敗戦後の植民地的無意識」（『ポストコロニアル』2001年4月岩波書店）（p98）。
- 11 1と同（p66）。
- 12 エマニュエル・トッド『第三次世界大戦はもう始まっている』2022年6月中公新書他
- 13 国連世界人口推計2019

（<https://tokyo.unfpa.org/ja/resources/>）による。

- 14 2022年8月集英社（p234～p235）。
- 15 「日記」1901年1月4日
- 16 「米国エネルギー省の研究所、頭蓋骨のX線分析でベーターベンのだ中毒を確認」2005年12月9日『日経メディカル』（<https://medical.nikkeibp.co.jp/nc/all/hotnews/archives/417510.html>）
- 17 「沈黙の春」（1962）
- 18 杉山大志編『SDGsの不都合な真実』（2021年9月宝島社）、カール・ローズ『WOKE CAPITALISM「意識高い系」資本主義が民主主義を滅ぼす』2023年4月東洋経済新報社）、『グリーン成長はおとぎ話である』今こそ議論したい“脱成長”とは【多元世界をめぐる】（<https://ideasforgood.jp/2023/07/26/beyondgrowth-2/>）
- 19 「パリ協定「目標達成困難」 各国の削減積み上げても国連報告書」2021年2月28日『朝日新聞』
- 20 1973年11月中央公論社（p104, p190～p199）。
- 21 「ロシア原子力ビジネス 断ち切れぬ欧州のジレンマ」2023年9月23日～『朝日新聞』
- 22 「カニもウニもロシア産 強い制裁掲げる日本、でも実態は『真空斬り』」2023年2月19日朝日新聞
- 23 ヤコブ・トーマ『ザ・キルスコア-資本主義とサステナビリティのジレンマ』鈴木素子訳2023年6月日経ナショナルジオグラフィック
- 24 『人新世の資本論』2020年9月集英社新書
- 25 『資本主義の次に来る世界』東洋経済新報社2023年5月（p26～p27）。
- 26 「孫の世代の経済的可能性」『ケインズ説得論週』（Essays in Persuasion John Maynard Keynes 山岡洋一訳 日経ビジネス文庫2021年12月）（p270～p276）。
- 27 東洋経済ON LINE「『ケインズの予言』の当たりとは？ 理由」（<https://toyokeizai.net/articles/-/300894>）
- 28 2と同（p471～p473）。
- 29 「ミダス王とは？ 黄金の手とロバの耳を持つ実在した王様の伝説と神話」（<https://turkish.jp/tourguide/>）
- 30 同様の寓話としてC.S.ルイス『ライオンと魔女』（1950）の「プリン」（瀬田貞二訳）の逸話が挙げられる。原作では日本では馴染みの薄いTurkish Delightという菓子であるが、参考までに本文を引用しておく。「Probably the Queen knew quite well what he was thinking; for she knew, though Edmund did not, that this was enchanted Turkish Delight and that anyone who had once tasted it would want more and more of it, and would even, if they were allowed, go on eating it till they killed themselves. But she did not offer him anymore.」
- 31 本文の引用および訓読は <https://blog.mage8.com/roushi-33>によった。現代語訳は「他人を理解する事は普通の知恵のはたらきであるが、

自分自身を理解する事はさらに優れた明らかな知恵のはたらきである。他人に勝つには力が必要だが、自分自身に打ち勝つには本当の強さが必要だ。満足する事を知っている人間が本当に豊かな人間で、努力を続ける人間はそれだけで既に目的を果たしている。自分本来のあり方を忘れないのが長続きをするコツである。死にとらわれず、『道』に沿ってありのままの自分を受け入れる事が本当の長生きである」とされる。なお漱石には1892（明治25）年、帝国大学第2学年に作成した論文「老子の哲学」があり、これについては別稿にて詳述する。

- 32 25と同（p189）。
 33 1911年10月22日、東京柏木の今井館での講演「デンマルク国の話-信仰と樹木とをもって国を救いし話」（『後世への最大遺物・デンマルク国の話』1946年10月岩波文庫）
 34 32と同（p239）。
 35 「聖書入門.com」（<https://seishonyumon.com/glossary/>）
 36 「随想 宇宙から国境は見えません」

（<https://dl.ndl.go.jp/view/prepareDownload?itemId=info%3Andljp%2Fpid%2F9283991&contentNo=1>）

37 John Lennon（1940～1980）'Imagine'（1971）

付記

本稿は2023年6月24日、「日本文芸学会第59回全国大会」（於フェリス女学院大学緑園キャンパス）にて開催されたシンポジウム「21世紀と夏目漱石」にて著者がパネリストとして発題した原稿を元に執筆したものである。発題内容は3部に分かれており、本稿はその第Ⅰ部である。第Ⅱ部「漱石と現代」（仮）、第Ⅲ部「漱石後期作品群から探る現代への示唆」（同）については順次発表を予定している。